

(4) 家庭におけるキャリア教育の可能性

笹井宏益

(国立教育政策研究所生涯学習政策研究部 総括研究官)

1. 幼少期におけるキャリア教育の意義

これまで高等教育、あるいは社会人に着目した形のキャリア教育、その前提としての学校教育はどうあるべきかということで、3人の先生方からお話しいただきました。ここで少し視点を変えて、学校教育の体系というより、むしろ家庭でどういう形のキャリア教育ができるのかについて考えてみたいと思います。家庭でのキャリア教育というのは、言葉としてはおかしいかもしれませんが。家庭で親が子どもに対してキャリア意識なりを醸成するようなかわり方とは、どのように考えたらいいのか、その辺のところについて私は発表したいと思います。

まず家庭教育とはどういうものかということについて、平成14年の文部科学省の懇談会報告の中の一文です。

「家庭教育は、親や、これに準ずる人が子どもに対して行う教育のことで、すべての教育の出発点であり、家庭は常に子どもの心の拠り所となるものです。乳幼児期からの親子の愛情による絆で結ばれた家族との触れ合いを通じて、子どもが基本的な生活習慣、生活能力、人に対する信頼感、豊かな情操、他人に対する思いやりや善悪の判断などの基本的倫理観、自立心や自制心、社会的なマナーなどを身に付ける上で重要な役割を担うものです。さらに人生を自ら切り拓いていく上で欠くことのできない職業観、人生観、創造力、企画力といったものも家庭教育の基礎の上に培われるものです」(『今後の家庭教育支援の充実についての懇談会報告書』平成14年文部科学省)。

この報告書は平成14年なので少し古いのですが、この考え方については多くの人たちの間で、共有されていると思います。



これを読んでみると、家庭での教育というものが、例えば職業観とか人生観、あるいは今後の人生を切り拓いていくときに必要な創造力とか企画力の基礎をつくるものだという指摘になっています。ですから、キャリア教育という形になっているものではないかもしれませんが、そういうものを考えていく上で、家庭での親と子のかかわりというのは、やはり重要な要素ではないかと思えます。

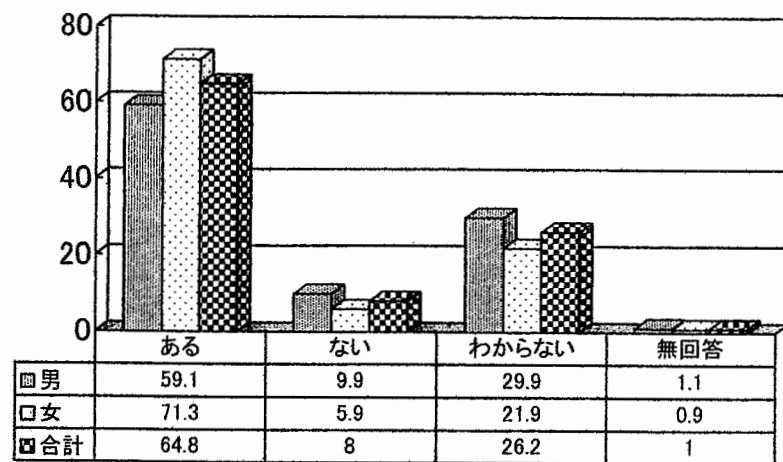
2. キャリア教育の内容

どういう形で家庭でのキャリア教育というものを考えていったらいいのか。発達段階にもよりますが、いわゆるシングルエイジの子どもたちを念頭においた場合、家庭における「キャリア教育」として何を行うかは、次の3点に集約されると思えます。

- (1) 多様な職業の存在を認知させ、それらの内容を理解させる
- (2) 働くことの意味を考えさせる
- (3) 人とかかわることの大切さを理解させ、それを円滑に行う力を身につけさせる

(1) 多様な職業の存在を認知させ、それらの内容を理解させる

図表4 1 「あなたは将来したい仕事がありますか」(N = 1175)

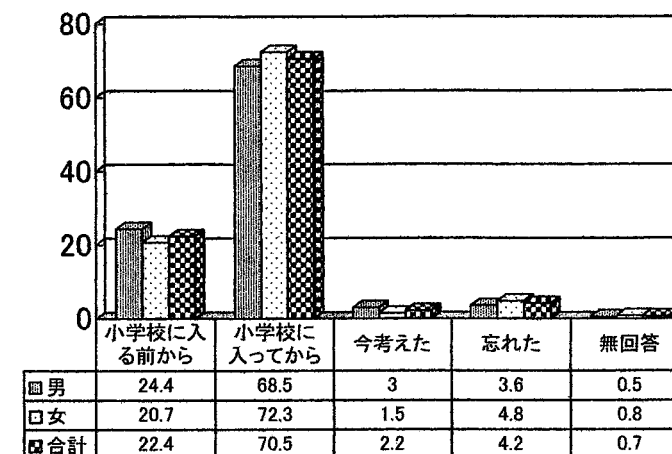


(出典)『生涯にわたるキャリア発達の形成過程に関する総合的研究報告書』
(平成17年国立教育政策研究所)より

上記の図表は、当研究所で行った「生涯にわたるキャリア発達の形成過程に関する総合的研究報告書」のデータで、小学校5年生1175人に聞いた結果です。普通家庭教育というとき、ターゲットにしている子どもたちはシングルエイジ、つまり小学校3年生までの子どもを念頭に置くのですが、その年頃の子はアン

ケート調査などになかなか答えてくれません。そこで、小学校5年生の調査でその傾向を推測したいと思います。この表によれば、「将来したい仕事がある」と答えた子どもがトータルで64.8%いました。だから、子どもなりに「何らかの職業に就きたい」「こういう仕事をしてみたい」と漠然と思っているということは、この数字から見当がつくだろうと思えます。もちろん「分からない」という子どもも3割弱いて、それは子どもにとっては正直な気持ちでしょうし、「ああ、当然だろうな」という思いがいたします。

図表4 2 「その仕事をしたいと思ったのはいつですか」(N = 762)

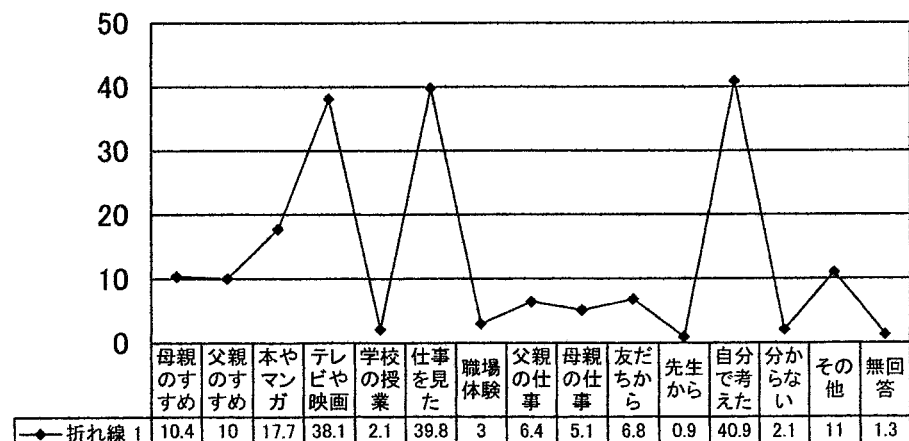


(出典)『生涯にわたるキャリア発達の形成過程に関する総合的研究報告書』
(平成17年国立教育政策研究所)より

次に図表4 2ですが、これは「したい仕事がある」と言った子どもに対してさらに聞いた質問です。「小学校に入る前から」という子が22.4%います。「小学校に入ってから」という子が一番多くて、7割を超えています。それ以前から「こういう仕事に就きたい」と思っている子どもが2割はいるという結果でした。そういうことからすれば、就学前あるいは幼少期の段階で、子どもなりに仕事のイメージ(憧れと同じような種類のものではないかと思えます)を持っているのではないかと推察されるわけです。

自分自身の経験からも、幼稚園のときにバスの運転手になりたいとか、大工さんになりたいとか、飛行機のパイロットになりたい、そういうことを言う子は多いということは分かります。そうであれば、世の中にはいろいろな職業があって、相互に支え合って社会全体ができていくということ、多様な職業があるんだということを子どもに教える、知らせる、あるいは気付かせるといったことが、親と子のかかわりの中で大事ではないかと言えそうです。

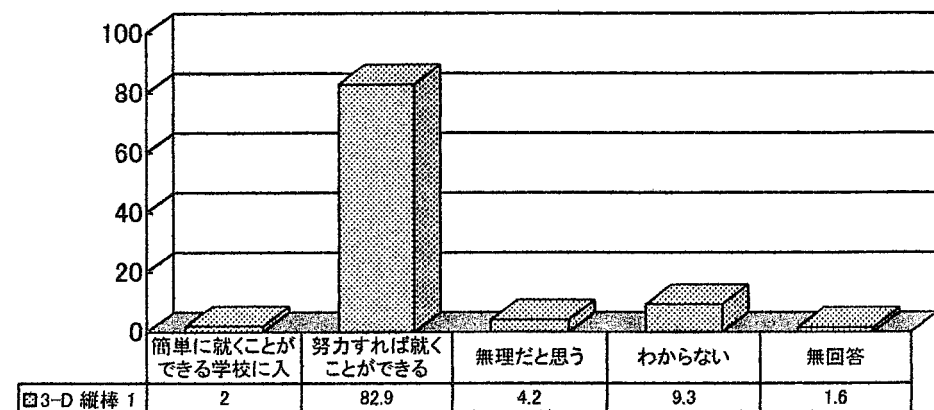
図表4 3「その仕事のことをどのようにして知りましたか」(N = 762)



(出典)『生涯にわたるキャリア発達の形成過程に関する総合的研究報告書』
(平成17年国立教育政策研究所)より

図表4 3も小学校5年生に対する質問ですが、これはこれまでに何人かの先生方が指摘されたように、親の仕事、父親の仕事を見てといった子どもは非常に少なく、社会、特に地域社会でいろいろ「仕事を見た」あるいは「自分で考えた」「テレビや映画」とかのメディアを通して知ったというのが多いわけです。多様な職業があるということを知る上で、メディアというのは大きな影響力を持っているということが、ここからも推測されるわけです。

図表4 4「あなたは、その仕事に就くことができますか」(N = 762)



(出典)『生涯にわたるキャリア発達の形成過程に関する総合的研究報告書』
(平成17年国立教育政策研究所)より

図表4 4については、「努力すれば就くことができる」と答えた子どもが8割を超えています。自分なりに職業のイメージを持ち、それなりに努力すればその職

業に就けるのではないかと、ほとんどの人が思っているということではないかと思えます。そのときに、働くことの意味、いわゆる職業観といったものを子どもたちにどのように伝えるかということが大事になるだろうと思えます。

(2) 働くことの意味を考えさせる

この調査研究の中では、子どもがいる親御さんも成人調査のところで回答してくれています。子どもがいる人たちに対して、「子どもが仕事を持って働くことに関して、何の目的で仕事に就かせて働かせたいのか」ということを親に聞いたのです。その中で一番多かった答えが、「自分の得意なことをさせてあげたい。その帰結として仕事がある」と答えた人が94.9%。これは、それぞれの項目についてイエスかノーかで答える質問でしたが、ほとんどの親は自分の子どもに対して、「あなたの得意なことを伸ばしてほしい」と思っていて、その延長に仕事があると考えていることがわかります。2番目にイエスが多いのは、「その子の自己実現のために」で91.5%、これも9割を超えています。やはり子どもの自己実現というか、得意なことをやらせるために仕事に就いてほしい、多くの親はそう思っていることがわかります。

逆に、立身出世というか、出世させたいから仕事に就きなさいと思っている親は21.8%、極めて少ない数字です。あるいは、社会的に評価されるような立派な人間になりなさい、そのために仕事に就きなさいと思っている親は42.3%、これも少ないです。社会的な評価を得るために子どもに仕事をさせるというよりは、むしろ子ども自身の自己実現のために仕事をさせたいと思っている親が多いわけです。そういう親御さんのお考えの中で、子どもに働くことの意味なり重要さというものをどのように伝えていったらいいのかが問題になると思います。

(3) 人とかかわることの大切さを理解させ、それを円滑に行う力を身につけさせる

将来、社会人となって仕事をしていく上で、非常に重要なのは人とかかわる力、コミュニケーションをしていく能力です。立田先生はそれを部分的にはコンピテンシーという言葉方をされたと思います。最近の研究によれば、コミュニケーション能力は、幼少期において、親をはじめさまざまな人たちが愛情をもってかかわることによって、育まれるものであることがわかっています。家庭教育としてそういうことを自覚的に進めていく必要があるのではないかと思います。

平成13年、当研究所で「家庭の教育力再生に関する調査研究」を行いました。これは継続的にフォローアップしている調査です。例えば親子のコミュニケー

ションの実態を調べようということで、いろいろな質問項目で調べてみるわけです。親子のコミュニケーションで一番多いのは、スキンシップをしたりとか、あるいは子どもの感情に親が共感するといった情緒的な関係、そういう直接的なコミュニケーションスタイルを非常に多くの親がとっています。特に年を取った世代と比べ、今の若い親御さんはそういうコミュニケーションをする傾向が非常に強くなっています。

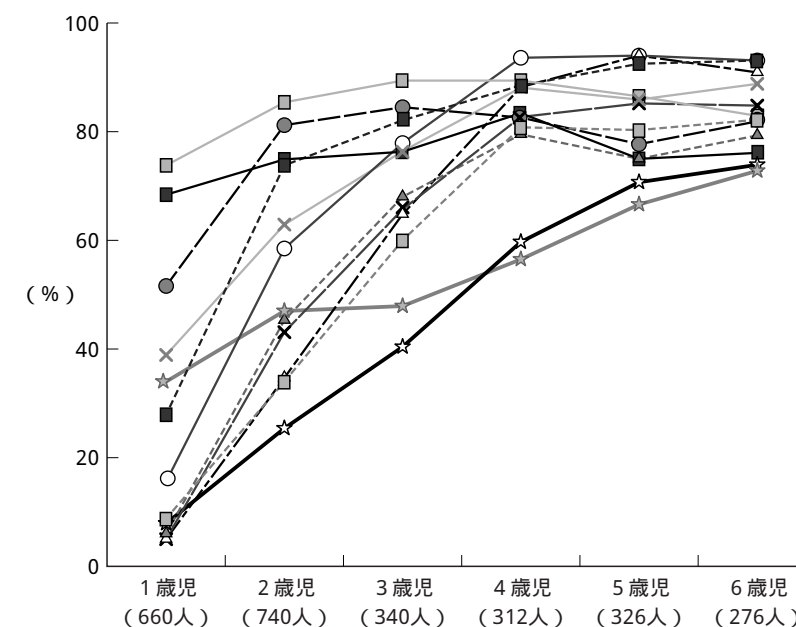
他方、家族に対する見方を同じ調査で調べてみますと、例えば、お父さん・お母さんの立場からすると、自分の配偶者の誕生日は盛大にお祝いする。お兄ちゃんや弟やお姉ちゃんなど、自分の家族のお祝い事は積極的にする。しかし、社会的に位置付けられているような、例えば、「母の日」「父の日」「お正月」「ひな祭り」といった社会的行事は、家族内の行事と比べると非常に消極的になっています。つまり、自分の家族のためのイベントは熱心だけれども、社会的なイベントには熱心ではないという傾向も出ているわけです。

そうすると、やはり自分の家族を中心に生活を考えているのではないかということが推察されるわけです。コミュニケーションといえども家族の中でのコミュニケーションが中心で、特に母親と子どもとの対峙というか「1対1の母と子の二元的な親子関係」というものばかりが強調されていて、そうでなければあとは「メディアと子どもの関係」ということになって、コミュニケーションを育む機会が極めて乏しくなっているのではないかと思います。

自分の経験からしても、今から大体40年ぐらい前には、地域でいろいろな人にかかわり合ったり、餓鬼大将のお兄ちゃんとかかわったり、自分の親以外にも多様なコミュニケーションのチャンネルを子どもは持っていました。このコミュニケーションのチャンネルをうまく使い分けて、地域のおじちゃん、おばちゃんに褒められたりとか、怒られたりとか、そういう経験を積み重ねながら人とかかわる力というものを身につけてきたと思うのです。そのように考えていくと、今の子どもたちには、そういう環境が極めて乏しくなっているわけで、これに対して今の若い親御さんの自覚というか、対応はもちろんのこと、第三者、つまり行政なり地域の人が何らかの支援をすることが必要になってきているのではないかと思います。

先ほど桐村先生から、社会全体でサービス化が進む時代になっているという話もありましたが、そうであるとすれば、やはりコミュニケーション能力は一人ひとりのキャリア形成の上で決定的に重要な要素です。そういうものを家庭教育の場でどのように育てていくかを、もう一度考える必要があると思います。

参考図表 人とのかかわりに関する発達（子どもの年齢別）



■	おとなの色をうかがいながらいたずらをする	68.4	74.9	76.3	83.4	75.0	76.1
□	他の子どもとおもちゃの取り合いができる	73.8	85.4	89.4	89.4	86.5	82.9
■	言い聞かせると欲しい物をがまんする	27.9	73.8	82.1	88.5	92.5	93.1
■	友だちとけんかをすると言いつけに来る	8.8	34.0	60.0	80.8	80.3	82.2
○	おもちゃなどを友だちと順番に使う	15.6	58.6	77.9	93.6	94.0	93.1
●	嫌なことをはっきり嫌と言える	51.6	81.2	84.5	82.6	77.7	81.9
△	入りたい遊びに「入れて」と言える	5.0	43.1	65.7	82.7	85.2	84.8
▲	自分の考えや意見を自分から言える	6.0	45.3	68.0	79.5	75.0	79.3
×	ルールを守って遊ぶことができる	5.0	34.7	64.8	88.2	94.0	90.9
×	「いけない」と止めると、やめられる	38.9	62.9	76.4	88.1	85.9	88.8
★	自分の感情をすぐ爆発させずに抑えられる	7.9	25.4	40.4	59.7	70.7	73.9
☆	失敗したりうまくいかなくても、すぐあきらめない	34.0	47.0	47.9	56.5	66.6	72.8

注1) できるの%

注2) 満1歳以上の幼児をもつ保護者の回答のみ分析

出典: Benesse教育研究開発センター『第3回幼児の生活アンケート報告書・国内調査(平成17年)』より